

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕

～デカルトの用法とその認識論～

村 上 吉 男

筆者がルネ・デカルト René DESCARTES (1596年－1650年) に関心をもたざるを得なくなったのは、シモーヌ・ヴェーユ Simone WEIL (1909年－1943年) が21歳に、『デカルトにおける科学と知覚』と題して書き上げた学士論文との出会いであり、このとき彼を理解せずに彼女さえ知ることができないであろうと感じたからである。彼への理解は筆者が本文のねらいとした、表題の「認識論」に向けられるが、その切っ掛けは以下に掲げる、学士論文中の文章に接したためにほかならない。

① Lorsque Descartes veut chercher la vérité, il ferme les yeux, il bouche ses oreilles, il efface même de sa pensée toutes les images des choses corporelles.... ... Ainsi la première démarche de Descartes pensant est de faire abstraction des sensations. ⁽¹⁾

デカルトが真理を探求しようと望む際、彼は目を閉じ、耳をふさいだり、この（耳目を注ぐ）物質的事物のあらゆる像を自分の思惟から消し去ったりもする...。... こうして思惟するデカルトの最初の手続きは諸感覚を考慮に入れないことにある。（括弧内は筆者）

② Il n'y a pas en son œuvre trace de sociologie. ⁽²⁾

デカルトの著作には社会学の形跡がない。

③ Que cet idéalisme et ce réalisme, tous deux extrêmes, soient pour lui (Descartes) non seulement conciliables, mais corrélatifs, ⁽³⁾ （括弧内は筆者）

両極端の観念論と実在論はデカルトにとって、たんに両立し得るだけでなく、相関的でもある... ということ。

① Quoi d'étonnant à ce que nous ne trouvions en Descartes qu'obscurités, difficultés, contradictions? ⁽⁴⁾

わたしたちがデカルトのうちに不明瞭，難点，矛盾しか見出しはしないということに，何か驚くべきものがあるのか。

筆者がデカルトの「認識論」の分析をめざすうえで，学士論文から抜き書きした引用文は，上記のそれで十分である。だが彼には，まずもって二用法における各「認識論」があるとされるから，シモーヌ・ヴェーユのこうした見方の窺える上記引用文が的を射たものかどうか，ここで彼の著作に引く引用文と照合させておかねばなるまい。

1. 〈真理の探求〉たる用法は感覚や想像を〈考慮に入れない〉
(または「思惟しない」) ことにある

① D'autant que nous n'avons point maintenant d'autre dessein que de vaquer à la recherche de la vérité, nous douterons en premier lieu si, de toutes les choses qui sont tombées sous nos sens ou que nous avons jamais imaginées, il y en a quelques-unes qui soient véritablement dans le monde, tant à cause que nous savons par expérience que nos sens nous ont trompés en plusieurs rencontres, et qu'il y aurait de l'imprudence de nous trop fier à ceux qui nous ont trompés, quand même ce n'aurait été qu'une fois. ⁽⁵⁾

わたしたちは，いま真理の探求に専念するほかないから，最初に感覚あるいは想像のもとに生じたある事物が存在するかどうかを疑うことにしよう。なぜなら，わたしたちは感覚がときに誤ることを経験しているし，一度でもわたしたちを欺いた感覚には信用しないのが賢明だからである。

② Or de ces idées les unes me semblent être nées avec moi, les autres être

étrangères et venir de dehors, et les autres être faites et inventées par moi-même. Car, que j'aie la faculté de concevoir ce que c'est qu'on nomme en général une chose, ou une vérité, ou une pensée, il me semble que je ne tiens point cela d'ailleurs que de ma nature propre; mais si j'ouïs maintenant quelque bruit, si je vois le soleil, si je sens de la chaleur, jusqu' à cette heure j'ai jugé que ces sentiments procédaient de quelques choses qui existent hors de moi; et enfin il me semble que les sirènes, les hippogriffes et toutes les autres semblables chimères sont des fictions et inventions de mon esprit. ⁽⁶⁾

ところでこれらの観念のうち、一方は生得観念、他方は外来観念、また他方は作為観念であるようにわたしには思われる。なぜなら、事物とは、真理とは、思惟とは何のであるかを理解するということは、ほかならぬわたしの本性そのものから得られるように思われるからである。わたしが騒音を聞いたり、太陽を見たり、熱さを感じたりすることはしかし、こうした感覚がわたしの外に存在する事物から生じていたとこれまではわたしに判断させたからである。そしてセイレン、ヒポグリプスやキマイラに似たものはすべて、わたしの精神によって作られるように思われるからである。

『第三省察』の冒頭文章⁽⁷⁾を利用したかに思われる、シモーヌ・ヴェーユの引用文④は、デカルトの引用文①と②での示唆の通り、〈真理の探求〉を目掛ける際の要諦である。筆者はその一を、④や①と②に共通する訳語〈感覚〉に絞り語ってみる。①は④の文意にほぼ等しく、〈感覚〉に〈sens〉を使用する。

一方②では、語句〈外来観念〉と、この説明を付した、〈Car (なぜなら)〉以降での二番目の文章とが④にかかわり、そのうえ〈外来観念〉も〈idée (観念)〉である以上、〈esprit (精神)〉に関連するからして、諸〈sens〉を〈ces sentiments (こうした感覚)〉にする。たとえば〈太陽を見たり〉は、④また註(7)の〈目を閉じ〉るのでなしに可能にし、この〈sens〉をさらに〈こうした感覚〉の一にさせる。要は〈騒音を聞いたり、太陽を見たり〉するが〈外来観念〉とされるにあって、これらの〈sens〉がおのおの〈精神〉に伝えられ、そこで〈わたしが熱さを感じ〉ると記されるような〈sentir (感じる)〉の働きを受けて、それぞれは〈sentiments〉の一に新たにならねばならぬのである。

〈外来観念〉が〈ces sentiments〉であると一見したことはとりあえず、〈外来観念〉が㊤や註(7)に書かれる〈あらゆる像〉に、同時に〈あらゆる像〉が〈ces sentiments〉に当てはまろうとみなしておく。少なくともこれが肯定されるは㊤や註(7)に対し、その〈目〉や〈あらゆる像〉を例にして繰返しえば、〈目〉を開け、〈あらゆる像〉を〈消し去〉らないと書かれることが、かつ前者の〈sens〉の、後者の〈あらゆる像 (ces sentiments)〉の一へとつながる関係を保有させることが前提になるからである。この関係を明記するうえで、筆者は㊤の訳中に、「耳目を注ぐ」という語句を括弧にして添えたわけである。デカルトにあって、〈sentiment〉は〈sens〉なしで産出しないと知るべきである。

反対に、〈sens〉や〈あらゆる像〉をもたらしに済むのはそれぞれ、〈目を閉じ、耳をふさぐ〉と、およそ〈sens〉を〈精神〉に伝達させ得ても、〈sentir〉の働きを止めるだけでよいと語られそうな註(7)や㊤なのである。だがシモーヌ・ヴェーユは㊤で、註(7)の〈je détournerai tous mes sens (わたしはあらゆる感覚を退けよう)〉との一文を削除する。彼女がこれを除いたとて、一文は、この前文を繰返すことに、また〈sens〉あつての〈sentiment〉だから、〈あらゆる像〉と書かれることに変わりがなく、それ以外新たな内容を盛り込ませはしない。ただし〈あらゆる像〉としては、〈sens〉が〈sentiment〉とならずに、〈sens〉のまま〈あらゆる像〉の一にみなされる場合もあるから、注意する必要がある。

ちなみに、〈sens〉は、註(7)や㊤の視聴覚器官をはじめとした五官(五感)や内臓器官によって産出される身体的能力であり、〈sentiment〉は、当初から精神の能力として配置される〈sentir〉の〈sens〉への働きかけによって産出される精神の能力である。そこで当然のこと、シモーヌ・ヴェーユが㊤の〈諸感覚〉をば〈sensations〉と書き入れるそれには、この〈sens〉や〈sentiment〉の両方が含まれるように捉えおかねばなるまい。しかし㊤の彼女の言にて再度いうが、デカルトのいわゆる《真理の探求》⁽⁸⁾の主張において、〈自分の思惟〉すなわち〈精神 (esprit)〉から、〈sens〉と〈sentiment (像)〉たる〈sensations (諸感覚)〉を考慮に入れないことが、筆者にするとこの「認識論」をも問うための、〈思惟するデカルトの最初の手続き〉として課せられてこよう。

《真理の探求》の「認識論」にあって、次なる〈手続き〉は㊤で〈思惟するデカルト〉と記される、形容詞的語〈pensant〉の、同時に動詞不定形でいえば〈penser〉の行使にある。これを探ることが㊤のもう一つの要諦となるし、どう

探るかが〈真理の探求〉を含めた「認識論」の認識の仕方を求めることに該当しよう。筆者はだから、〈真理の探求〉での、たとえば〈物質的事物のあらゆる像〉を、もはや②の〈ouïr（聞く）〉、〈voir（見る）〉や〈sentir（感じる）〉ならびに①の〈imaginer（想像する）〉ではなしに、〈penser（思惟する）〉でもものするとみてよいか、このいわば知る働きとしての、〈わたしたち〉に与えられた諸能力が、いかなる順序にて活用させられるか、さらにいかにして②でいう〈外来観念〉を除く、〈生得観念〉や〈作為観念〉だけを可能にしてしまうのかを質さなければならなくなる。

③ Qu'est-ce donc que je suis? Une chose qui pense. Qu'est-ce qu'une chose qui pense? C'est-à-dire une chose qui doute, qui conçoit, qui affirme, qui nie, qui veut, qui ne veut pas, qui imagine aussi, et qui sent.⁽⁹⁾

わたしとは何のであるのか。思惟するものである。思惟するものとは何か。すなわち疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた想像し、感じるものである。

上記引用文③の動詞として示される諸語が〈penser〉という、あるいは〈ma pensée（わたし（自分）の思惟）〉の諸能力となる。つまり〈penser〉は〈sentir（感じる）〉につき述べたときと同様、当初から〈わたし（たち）〉の精神に所有されてあるのみか、能動的に働きかけるとともに、③（または②）の〈concevoir（理解する）〉を筆頭にした諸能力すべてを包括して語られるデカルトの用語であると受け取り得る。

だがすでに明らかにしたように、〈penser〉に組み入れられる〈sentir〉や〈imaginer〉はおおの、〈真理の探求〉ではまったく働きかけることがないし、それ自体身体能力である〈sens（感覚）〉や〈imagination（想像）〉とも異なる各能力であり、かつたとえ身体各能力への働きかけにより、〈あらゆる像〉としての〈sentiment（感覚）〉や〈imagination（想像）〉の各〈像〉を産出し、しかるのちはじめて、各〈像を自分の思惟から消し去〉る場合すら想定し得ると捉えられども、この各〈像〉とも異なる各能力でしかない。要は〈真理の探求〉での〈sentir〉や〈imaginer〉が③にて最後尾に記される各能力に位置してはそ

れぞれ、たんに付け足されてあるだけにすぎなくなるし、〈あらゆる像〉である〈感覚〉や〈想像〉を〈考慮に入れない〉と、したがってこれらの各産出の手助けとなる③の〈感じる〉や〈想像する〉各能力を〈考慮に入れ〉ずば、もとより、その残りが〈esprit (精神)〉の諸能力でしかなく、これも当初から〈わたし (たち)〉に与えられてある諸能力であるとみておかねばならないのである。

そこで〈esprit〉は、この〈penser〉のおのおのを発揮させんとする〈intellection (知性)〉で、あるいはデカルトでは〈知性〉の語より使用頻度が多く、ときにこれとほぼ同意に捉えられよう、〈entendement (悟性)〉や〈raison (理性)〉で組み立てられているといえることができる。

④ Je ne suis donc, précisément parlant, qu'une chose qui pense, c'est-à-dire un esprit, un entendement ou une raison. ⁽¹⁰⁾

それゆえ正確に言って、わたしとは思惟するもの、すなわち精神、悟性、理性でしかない。

だが④にいう〈esprit〉がまた〈わたし〉、〈思惟するもの〉、〈知性、悟性、理性〉であることは、デカルトが〈esprit〉をどのようにみなしていたからか。それを以下に提示する三つの引用文で確かめておこう。

⑤ J'ai souvent aussi fait voir fort clairement que l'esprit peut agir indépendamment du cerveau; car il est certain qu'il est de nul usage lorsqu'il s'agit de former des actes d'une pure intellection, mais seulement quand il est question de sentir ou d'imaginer quelque chose. ⁽¹¹⁾

わたしはまたときに明晰に、精神 (esprit) が脳と無関係に働きかけ得ることを示しおいた。なぜなら確かなことは、脳は純粋な知性の働きを生み出すときにでなしに、たんに何かを感じたり、想像したりするときに働くことにあるからである。(括弧内は筆者)

⑥ Parce que, d'un côté, j'ai une claire et distincte idée de moi-même, en tant que je

suis seulement une chose qui pense et non étendue; et que, d'un autre, j'ai une idée distincte du corps, en tant qu'il est seulement une chose étendue et qui ne pense point, ...⁽¹²⁾

なぜなら、一方で、わたしがただ思惟するものだけで、延長する事物でなく、他方で、身体がただ延長する事物だけで、少しも思惟するものでないというかぎりにおいて、わたしは、明晰で判明な観念を、また身体から区別された観念をもつからである。

⑦ Je ne les (images) appelle point ici de ce nom (nom d'idée), en tant qu'elles (images) sont en la fantaisie corporelle, c'est-à-dire en tant qu'elles (images) sont dépeintes en quelques parties du cerveau, mais seulement en tant qu'elles (images) informent l'esprit même, qui s'applique à cette partie du cerveau.⁽¹³⁾ (括弧内は筆者)

わたしはここでは、像が物質（身体）的表像らしくある、すなわち像が脳のいくつかの部分に描かれるというかぎりにおいて、この像を観念と呼ばない。しかしわたしは、像が精神（esprit）そのものをかたちづくる、すなわち精神（esprit）が脳のこうした部分に取って代わられるというかぎりにおいて、この像を観念と呼ぶ。（括弧内は筆者）

引用文⑤は〈精神（esprit）〉を〈脳〉と捉えはしない。〈脳〉の働きは身体の〈感覚（sens）〉を例にして、一に〈脳〉の〈感じる（sentir）〉の〈sens〉への働きかけによる〈感覚（sentiment）〉の産出と、一に身体の〈sens〉を〈受動〉的に〈脳〉の〈sens〉として受け入れさせるとみたのに反し、〈精神〉が〈働きかける〉その〈能動〉的働きは、〈知性、悟性、理性〉が〈思惟する〉ことにある⁽¹⁴⁾。つまり〈精神〉は〈純粋な知性の働きを生み出す〉ところなのである。

また引用文⑥の〈わたし〉は同④に〈精神〉や〈悟性、理性〉と記されるからして、もはや〈身体〉や〈脳〉でもなくなるのみか、デカルトはその〈わたし〉において、〈純粋な知性の働き〉たる、〈身体（脳）から区別された観念〉の、すなわち〈明晰で判明な観念〉の誕生のことを持ち出さずにおれなかった

のである。〈思惟するもの〉である〈わたし〉が〈思惟する〉ことにより、〈観念〉が〈脳（身体）〉にでなく、〈精神（esprit）〉にもたらされてくるといえるわけである⁽¹⁵⁾。

こうしてデカルトは引用文⑦で、〈観念〉は〈像〉と違うと結語する。〈像〉は同⑤や⑥でも、彼に暗に、〈延長する事物（身体）〉なる〈脳〉が身体内外の、これも〈延長する事物〉にすぎない〈何かを感じたり、想像したりする〉ことに起因するよう語らせるのだから、⑦の〈脳のいくつかの部分に描かれた〉、〈物質（身体）的表像〉以外でなくなる。〈物質（身体）的表像〉は当然〈像（image）〉でしかない。〈像（image）〉はまた、あの④や註（7）で〈あらゆる像（toutes les images）〉としても使用されていた。とまれこの〈image〉からは、それが〈精神（esprit）〉ではなく、〈脳（身体）〉の産出物にほかならなくなるといえる。このことは次の引用文でも同様に知り得ることである。

⑧ Je réponds... qu'aucune espèce corporelle n'est reçue dans l'esprit, mais que la conception ou l'intellection pure des choses, soit corporelles, soit spirituelles, se fait sans aucune image ou espèce corporelle.⁽¹⁶⁾

わたしは、いかなる物質的像も精神（esprit）に受容されることはないどころか、物質的事物であれ、非物質的（知的）事物であれ、各事物に対する純粹な知性（思惟）はいかなる物質的像（image）もなしにかたちづくられると答えおく。（括弧内は筆者）

ところがデカルトは、⑦で同時に、〈精神（esprit）〉が脳のこうした部分に取って代わられる」とする前提下に、〈像を観念と呼ぶ〉という。だがそれでも、引用文⑧に〈いかなる物質的像も精神（esprit）に受容されることはない〉とも語るからして、たとえば、〈脳〉へとどく身体の〈sens〉や、〈脳〉での新たな能力〈sentiment〉たる各〈像〉がそのまま〈観念〉になると断じているのではあるまい。なぜなら各〈像〉の産出は〈思惟する〉に起因してこないし、〈思惟する〉ことが〈観念〉を誕生させ、〈観念〉をして〈esprit〉たらしめると筆者に読み取らせるからである。とどのつまり〈思惟する〉働きかけが〈esprit〉にすることを、彼は〈精神（esprit）〉が脳のこうした部分に取って代わられる」と表

わすはかなかったといえる。少なくとも〈像〉が描かれる〈脳のこうした部分〉は〈物質的〉なのであり、この〈部分〉を〈esprit〉にすりかえたのではない。

〈像〉が〈観念〉になると、一に〈思惟する〉ことは必要でなくなる、一に〈esprit〉が〈脳〉に見立てられてしまう、一に〈延長 (étendue)〉である身体 (脳) と、〈思惟 (pensée)〉である精神とを二元に対立させて構築する〈真理の探求〉の認識論においてさえ、あたかも〈日常的用法〉の認識論から導出し得る、その身体 (脳) と精神の合一が問われなければならない。しかし〈真理の探求〉の認識論ではそんなことはあり得ない。〈思惟する〉ことが何れともあれ、その解明を試みさせる条件となる。〈思惟する〉とは引用文③の通り、そこに表記されているように、実際の活用が認められていない〈sentir〉や〈imaginer〉を除いて捉えられる諸能力であった。たとえば〈sentir〉は〈esprit〉のでなしに、〈脳〉の能力とみられたがゆえに、〈脳〉へとどく身体の〈sens〉に働きかけて〈sentiment〉たる〈像〉をつくり上げることができたのである。〈sentir〉が働きかけずば、むろんこの〈像〉は産出されないのみか、〈消し去〉られるにも及ばない。〈像を観念と呼ぶ〉その像は〈思惟する〉による像となる。

〈sentir〉や〈imaginer〉を除いた諸能力はしかし、〈精神 (esprit)〉が成ってから、〈観念〉をつくるために働きかけるのではない。換言すると、はじめにありきは〈esprit〉でなく、〈思惟する〉にあるということである。なぜか。それは、

⑨ Puisque les idées mêmes ne sont rien que des formes, et qu'elles ne sont point composées de matière. ⁽¹⁷⁾

観念自体はある種の形相なのであって、いかなる質料によっても構成されてはいないから (である)。

〈思惟する〉ことなくば、もとより〈観念〉は誕生しない。だが引用文⑨のように、〈思惟する〉結果として〈ある種の形相〉になっても、〈形相〉に変わらない、その〈観念〉は、もはや〈精神 (esprit)〉か、少なくとも〈esprit〉の〈観念〉かに位置づけられなければならぬであろう。アリストテレスが使用しはじめたと聞く〈形相 (エイダス)〉はプラトンでいう〈イデア〉、すなわちこの現実世界とは相違したもう一つの世界をさすであろうが、デカルトはその〈イデア

ア)を、彼にいう〈精神 (esprit)〉に取り込んでいたと推察する。これが彼が〈ある種の〉と断じる〈形相〉にほかならなくさせよう。そこでデカルトはプラトンにとって〈イデア〉獲得に欠かしてはならない〈死の訓練〉を、シモーヌ・ヴェーユでいえば〈不幸〉を経ることなしに、たんに〈思惟する〉を駆使して〈ある種の形相 (イデア)〉たる、〈esprit〉の〈生得観念 (idée)〉に到達せんとする〈真理の探求〉を打ち立てたといえるのである。

筆者はここに、〈精神 (esprit)〉が引用文⑧や⑨で記される〈非物質〉や非〈資料〉以外にないと断じ、かつ〈思惟する〉ことで誕生しよう、その「非〈質料 (物質)〉」的あるいは非空間的、非時間的〈観念〉が〈esprit〉そのものを、要は〈わたし〉を、延いては〈わたしの存在〉までを明らかにさせるし、このことが〈真理の探求〉としての〈Je pense, donc je suis (わたしは思惟する、それゆえわたしは存在する)〉⁽¹⁰⁾という第一命題に潜んでいるとみる。そして周知のごとく、デカルトは〈わたし〉と〈わたしの存在〉から、〈神の存在〉や〈物質的事物の存在〉を順次確かめる。しかし彼が〈Je pense (cogito)〉を先き立たせる、その認識論を何よりもまず解き明かさずして、各〈存在〉の存在論は成り立ってこないと、だからこうした序列 (順序) を立てて、当時いまだ隆盛であり続けたスコラ (哲) 学 (神学) を批判し覆させ得たのだといわざるを得なくなる。

それはともかく、筆者はデカルトが引用文③や④に、〈une chose qui pense〉と記すときのみ、〈une chose〉は⑧の〈les choses corporelles (物質的事物)〉の〈事物〉でなくして、人間たとえば〈わたし〉を表わす〈(思惟する) もの〉と訳出した。しかしながら彼がまた〈思惟するものは思惟する間は、存在せざるを得ない〉⁽¹¹⁾と、あるいは①で〈わたしたちは〉と書くにあっても、現実世界には結局、〈思惟するわたし〉だけが一人〈存在〉すると彼に確信させるばかりで、ほかの人間 (の存在) や〈物質的事物 (の存在)〉については、たんに〈観念〉として認識する以外の手立てが彼に失われてくるのである。よしんば〈物質的事物 (の存在)〉を「ほかの人間 (の存在)」に換言するにしろ、これも〈観念〉以外の認容になり得ないことでは同じなのである。

そこで「ほかの人間 (の存在)」や〈物質的事物 (の存在)〉があなた (の存在) に換えられようが、〈わたし〉は「あなた (の存在)」を、そのかわりを〈わたしの思惟〉の対象としてしか確証できなくなるし、〈わたし〉からみる

〈あなた〉を自分という一人称に捉えたところで、その〈わたし〉によって〈思惟する〉結果は上記と同じである。それどころかシモーヌ・ヴェーユが引用文⑩で指摘する通り、デカルトは〈わたし〉も含めた三人以上（の存在）を、そのかわりを明かさずにいない〈社会学〉を〈わたしの思惟〉の対象に織り込むことさえできなかったのである。〈わたし（の存在）〉に固執する彼の主張はだから、いわゆる《独我論》に終始しようと断じられても仕方ないわけである。

そして、デカルトが註(7)に、〈わたしは目を閉じ、耳をふさぎ〉とか、さらに〈物質的事物のあらゆる像を自分の思惟から消し去〉れとか、そのうえ〈像を当てにならない、見せかけのものとみな〉せとか記すとき、これらの表記は、シモーヌ・ヴェーユがまた引用文④で、〈像〉を産出させる〈諸感覚を考慮に入れない〉と明記したことに等しくなる。要するにすべての表記は、〈精神(esprit)〉が〈像〉を思惟しないにかかわらせることを示唆する。前記中の〈わたしは目を閉じ、耳をふさ〉ぐとは確かに、諸感覚器官を用いない各例である。だがこれが〈わたし〉にとって自然な状態を保持することなのか、そうではない。それで〈わたし〉は「諸感覚器官を用いない」ではなしに、引用文②の〈騒音を聞〉くや〈太陽を見〉るように、耳目（身体）の通常の機能にまかせるとすると、諸感覚器官での各感覚は当然〈脳〉（身体）まで伝わり、〈脳のいくつかの部分〉に各〈像〉を描く（産出させる）であろうし、このことさえ含ませて、彼は〈像を自分の思惟から消し去る〉といい、彼女はその〈諸感覚を考慮に入れない〉という自らの言葉でまとめようとしたのである。

身体の〈sens（感覚）〉なる〈像〉がそのまま〈脳のいくつかの部分に描かれる〉ことは、そこにかの〈sentir（感じる）〉が働きかけずに可能になることを語っている。以下の引用文がこれを明らかにする。

⑩ Ces objets (de nos sens) qui, excitant quelques mouvements dans les organes des sens extérieurs, en excitent aussi par l'entremise des nerfs dans le cerveau, ... ⁽²⁰⁾ (括弧内は筆者)

わたしたちの感覚の対象は、外的感覚器官である運動を引き起こしながら、神経を介して脳でその同じ運動を引き起こす。

〈外的感觉器官〉は既出語でいうと、〈目（視覚器官）〉や〈耳（聴覚器官）〉である。〈目〉を例にして、この〈ある運動〉とは、たとえば〈太陽〉という〈対象〉が〈目〉に〈太陽〉の感覚（視覚）像を結ば（生じさ）せる当のことを、かつ〈脳〉での〈その同じ運動〉とは、「視覚像」がそのまま〈神経を介して〉は〈脳〉に伝えられ、〈脳〉としての「（視覚）像」にさせる（だから〈脳〉による〈像〉の産出といえる）当のことをさす。それでもこの身体の〈sens〉たる〈像を自分の思惟から消し去〉りたくば、〈わたしは目を閉じ、耳をふさ〉げばよいだけなのである。それはむしろ、〈わたし〉が「視覚像」を〈目〉や〈脳〉に受け入れなくて済ませられることを意味させるにはかならない。

しかし、〈脳〉の〈sentir〉が〈脳のいくつかの部分〉に達した身体の〈sens〉に働きかける際はどうか。このとき〈脳〉の一〈部分〉で、新たな能力〈sentiment（感覚）〉が、すなわちその〈像〉が産出されるといった。デカルトが〈脳〉での身体の〈sens〉たる〈像〉とともに、いやこれよりむしろ、〈脳〉で新たに産出された〈sentiment〉たる〈像〉をも〈消し去〉れというのであれば、それこそ「思惟しない」に相当するが、およそ、「耳目を注ぐ」条件下での身体の〈sens〉たる〈像〉や、〈脳〉ではじめて〈sentiment〉となった〈像〉さえ、〈消し去る〉に、とどのつまり「思惟しない」に言い換えてさしつかえなかりと推測する。なぜなら、身体の〈sens〉たる〈像〉が〈脳のいくつかの部分〉にあって自然に消滅してしまう場合もあるからである。（またその〈部分〉に〈像〉が記憶となって残るやもしれない。だがここは「記憶」や引用文⑩の〈神経〉についてさらに語るところでなくとも、とくに「記憶」のことで注意すべきは、これが上記の各〈像〉だけで構成されており、〈思惟する〉にかかわらない、〈脳〉の一能力となるにすぎないことにある。）

しかし、筆者が先きに〈消し去る（effacer）〉を「思惟しない」に換言し得ると記し、はたまたここに、身体の〈sens〉や〈脳〉で産出した〈sentiment〉の各〈像〉をして「消滅」たらしめると付け加えることで、果たして「消滅」も「思惟しない」と同意語になるとみることが質されよう。結語からいうと、「消滅」と「思惟しない」は相異語と捉えられる。「思惟しない」は一に、〈思惟する〉の否定の表現であるから、〈思惟する×精神（esprit）〉に与する諸能力のいかなる「能動」的働きかけもないことを意味させる、一にしかし、こうした〈esprit〉の働きかけないとする作為を読み取らせてくる。

また一に、その働きかけなくば、〈観念〉の誕生はないし、それだからここで本当は、前段に記した〈精神 (esprit)〉になり得ぬので、この語すら用いてならないが、それでも「思惟しない」は、いわば〈思惟する〉が何もしないごとくにある代わりに、〈脳のいくつかの部分〉の一ですでに成った〈像〉である身体の〈sens〉または〈sentiment〉を、今度は〈脳のいくつかの部分〉の他の一に、いわゆる〈動物精気〉として送り出すことに当てはめられるのみか、なるほど「思惟しない」がかかる〈部分〉の一の諸感覚（または諸想像）に関連するだけであっても、もしかして「思惟しない」はさらに、この〈部分〉の他の一がそこに送り込まれた〈動物精気〉の諸感覚（または諸想像）に対して働きかけないことを含意させるやもしれぬといい得る。その諸感覚（または諸想像）たる各〈像〉の方は、それぞれがもともと〈思惟する〉とは無関係であって、は、「思惟しない」場合でさえその影響を受けることがないのだから、当然「作為」をもって「消滅」するわけにはいかないし、まして「思惟しない」では、〈物質〉である〈像〉から、〈esprit〉を成り立たせる〈観念〉が誕生するなどは不可能となるほかなかったとみておくべきなのである。

⑪ Par le mot de penser, j'entends tout ce qui se fait en nous de telle sorte que nous l'apercevons immédiatement par nous-même; c'est pourquoi non seulement entendre, vouloir, imaginer, mais aussi sentir, est la même chose ici que penser.⁽²¹⁾

わたしは思惟するという語を、わたしたちのうちにつくられるもののすべてであり、わたしたちがそのすべてを直接に知覚する、という意味で用いる。それゆえ理解する、意志する、想像することだけでなく、感じることも、ここでは思惟することと同じである。

既出引用文③とほぼ同じ内容を有する、上記引用文⑪がそれとして、なぜここに記されねばならぬのか。それは、筆者がすでに述べたことを多少詳細に語らんがためである、つまりまずは最初に、〈penser (思惟する)〉が③や⑪に書かれるように、いかに多くの「能動」的諸能力を代表して使われるといえども、〈真理の探求〉にあっては繰返すが、⑪を例にしての〈entendre (理解する)〉や〈vouloir (意志する)〉が〈思惟する〉中の中核的諸能力に含まれるに反し、

〈imaginer (想像する)〉や〈sentir (感じる)〉は〈像〉の形成だけに関与し、〈思惟する〉に与しない諸能力であることを明確にさせておかねばならないからである。筆者が諸能力をかく区別するのは、既出引用文⑩の語を用いては、その区別された諸能力の各〈運動〉自体の違いによるといえるし、これはおのずと各〈運動〉のその部位をも明らかにさせずにいないとみるためである。〈運動〉の「部位」とはこれも前記した、既出引用文⑦の語句でいう、〈脳のいくつかの部分〉と表記される〈部分〉に相当し、〈部分〉はまた、すでに語った「〈部分〉の一」とした〈腺H〉を、同様に「〈部分〉の他の一」とした〈脳本体〉をさすことになると解釈する。これらはもとより〈脳〉(内)の各「部位」ではない。

次に、〈腺H〉には、身体の〈sens〉や〈imagination〉がおのおの、ときにその〈共通感覚の座〉に、ときにその〈想像の座〉にとどく(受け入れられる)ので、身体の各能力の〈運動〉自体は、〈腺H (脳)〉の各〈座〉からみると、「受動」的〈運動〉でしかなくなる。さらに各〈座〉で〈sentir〉や〈imaginer〉の働きかけを受けて産出し得た〈sentiment〉や〈imagination〉たる各〈像〉は、現代生理学でもいう「閾値」を実際超えて〈腺H〉の〈表面に描かれ(表出し)〉なければ、〈腺H〉内の〈小さな動脈〉にて「消滅」するか、かつ〈小さな動脈〉に結びつく〈細糸(神経)〉に伝われども、この〈細糸〉の運動に従わなければ、そこから〈腺H〉の外の〈動脈〉に〈動物精気〉となって戻り、その〈動脈〉の行き先きである〈脳本体〉に流れゆくかするであろう。

また、〈腺H〉に受容された上記諸能力のうち、身体の〈sens〉に例を取って繰返してでも明確にさせておくべきは、前段で指摘もした、〈sentiment〉の産出にかかわろう〈sentir〉の以下のことである。〈sentir〉は既出引用文③や⑪に記されるごとく、〈思惟する〉に含まれてよいし、これが〈脳〉のいずこにあるかを探るならば、他の〈imaginer〉、〈concevoir (entendre)〉や〈vouloir〉とともに、〈脳本体〉にあらうことがその一となる。しかし〈sentir〉は〈脳本体〉に受け入れられる能力に働きかけるのではなしに、むしろその働きかけとは相違して、〈脳本体〉を〈神経を介して〉出て、ここから〈共通感覚の座〉としての〈腺H〉の〈小さな動脈〉に伝わる(働きかける)ことがその一となる。〈sentir〉(同様に〈imaginer〉)が可能にするこの伝達こそ、他の〈思惟する〉能力と同じ「能動」的能力になりながらも、〈脳本体〉内だけでの〈運動〉と異なる〈運

動)であること、つまり〈sentir〉は〈imaginer〉と並んで、〈脳〉の他の「部位(腺H)」に働きかける〈運動〉しかしない違いが生じること、そこで違った〈思惟する〉にもなることがその一となる。もとより〈sentir〉が〈腺H〉ですでに受容した身体の〈sens〉に働きかけた結果は、その〈小さな動脈〉での〈sentiment〉の産出であったわけである。

そして、〈真理の探求〉の〈精神(esprit)〉では、〈腺H〉での身体の〈sens〉たる〈像〉を、さらに〈sentiment〉たる〈像〉をも〈消し去る〉(「思惟しない」)とされるから、各〈像〉は〈観念〉に関与することがなくなる。要は〈腺H〉で産出し、かつその〈表面に描かれ(表出し)〉ようと、この各〈像〉は〈観念〉にみなされはしないということである。〈腺H〉にのみ関係した〈sentir(またはimaginer)〉以外の〈思惟する〉諸能力が〈観念〉にかかわらざるを得なくなる。とどのつまり〈思惟する〉中の〈concevoir(entendre)〉や〈vouloir〉が〈観念〉を誕生させる。これらの能力は再度いうが、〈腺H〉から流れて〈脳本体〉に受容される能力に対し、各働きかける「能動」的〈運動〉を有するのみで、他の「部位」へのこの〈運動〉を展開させることはない。

これら〈思惟する〉能力はまた、〈脳本体〉での〈観念〉の誕生をもって、デカルトが既出引用文⑦にて、〈精神が脳のこうした部分に取って代わられるというかぎりにおいて、この像を観念と呼ぶ〉と書き込んだ際、〈思惟する〉効力を発揮させずにおかないばかりか、それこそ〈脳本体〉をば〈精神(esprit)〉にする能力に位置づけられてくる。なぜなら、筆者は⑦の〈脳のこうした部分(cette partie du cerveau)〉を、単数の〈部分〉であるからして〈脳本体〉とみなさずに、〈真理の探求〉の〈思惟する〉諸能力が〈esprit〉と語らせよう「部位」をいかなる「部位」に見出して活かされるかは、もはやこの〈脳本体〉を除いてはないといえるからである。そのうえ諸能力が〈脳本体〉内で活かされ(運動し)て可能となる〈像〉が⑦の〈この像〉であるならば、〈この像〉は⑦で同じく〈像が脳のいくつかの部分(quelques parties du cerveau)に描かれる〉と記される、複数の〈部分〉なる〈腺H〉や〈脳本体〉の諸〈像〉を含めた〈あらゆる像〉の一としての〈脳本体〉の像であって、〈腺H〉でのいくつかの〈像〉をさすのではまったくない。

〈腺H〉は総じていう感覚(または想像)が関与する一〈部分(部位)〉ではないために、〈真理の探求〉の〈精神(esprit)〉はこの能力に関知してはなら

ない。しかし〈脳〉の「部位」は〈腺H〉だけでなく、このあとに接続しよう〈脳本体〉もあるのだから、〈脳本体〉に向けて、〈腺H〉から出た能力を含有する〈動物精気〉が流れゆかねばならない。そして〈脳本体〉に流れ込む〈動物精気〉のなかでその〈神経〉とかかわる能力に対し、〈脳本体〉の、たとえばかの〈理解する〉という〈思惟する〉は必らずや〈この像〉をもたらず。かつ〈物質（身体）〉である〈脳本体〉を、〈物質（身体）〉でない〈精神（esprit）〉に〈取って代〉える（すりかえる）と、〈この像〉は〈観念〉となる。換言すると上記した〈思惟する〉能力による〈この像〉を〈観念〉と捉え得るからして、〈脳本体〉が〈esprit〉になるということである。

（なお筆者はここに、〈脳本体〉での〈この像〉を一に、〈思惟する〉中のその諸能力だけに委ねるのでなしに、〈腺H〉に働きかける〈感じる〉や〈想像する〉はむろんのこと、身体感覚や想像を含め成り立たせたり、一に、〈真理の探求〉における〈観念〉とあえてみなすのでなしに、〈腺H〉や〈脳本体〉に生じる〈あらゆる像〉に敷衍し、それぞれの〈像〉のままで〈観念〉と直接言い換えさせたり、一に、〈精神（esprit）〉の証しとするのでなしに、この〈脳本体〉をもして〈精神（âme）〉たらしめる際の〈像〉にしたりする用法、すなわち〈真理の探求〉ではない〈日常的用法〉が、その認識論がデカルトに待望され、彼がいずれの用法の究明から取りかかったのか今は問わずとも、〈日常的用法〉とその認識論を構想せんとしたと読み得ることを付け加えておく。なぜなら、一つの精神しか持ちあわせない〈わたしたち〉にとって、両用法で同じ認識の過程がたどられねばならぬのであり、この過程のなかで、どちらかの用法が感覚や想像を取り入れるかどうかにかかわるにすぎないからである。〈真理の探求〉や〈日常的用法〉がそれぞれ、その過程の途中まですら異なる、個別の認識論を有するというのでは、シモーヌ・ヴェーユが引用文⑩で語るまでもなく、認識論なるものは〈不明瞭〉で〈難点、矛盾〉を抱えるだけであろう。）

たとえば〈脳本体〉の〈理解する〉能力が、〈腺H〉から〈脳本体〉にとどく、〈腺Hの表面〉で表出することのない感覚や想像なる各能力に働きかけて、〈脳本体〉で描く〈この像〉こそデカルトにあって〈観念〉といわれるものになるのだから、〈脳本体〉はすでに指摘した通り、〈精神（esprit）〉とみられてよいわけである。だがその〈理解する〉が働きかけない、要するに「思惟しない」ならば、〈脳本体〉は当然、そこに〈この像〉を描くに至らないし、まして

〈esprit〉と見立てられることもないであろう。「思惟しない」との見方にはこのように、〈腺H〉から〈脳本体〉に〈動脈〉を流れてくる〈動物精気〉中の諸能力に、〈脳本体〉を出所とする〈理解する〉などの諸能力が働きかけない場合も含まれてこようが、それでもこの「思惟しない」ことよりか、〈この像〉を〈観念〉に、〈脳本体〉を〈esprit〉にさせよう〈思惟する〉ことがあたかも常時課せられないかぎり、〈真理の探求〉の認識論の成立さえおぼつかなくなる運命にあるといえる。

しかしながら、筆者はなぜ「思惟しない」ことをここでも持ち出せ得るのか。それは〈真理の探求〉にあって、デカルトの既出引用文②にいう〈外来観念〉が取り除かれるからである。そうでないと、〈真理の探求〉（の認識論）は成り立たなくなる。つまり、〈腺Hの表面〉で表出せずに、〈腺H〉から出て〈脳本体〉に流れついた〈sentiment〉などの諸能力に、たとえば〈理解する〉が〈思惟する（働きかける）〉と、この〈思惟する〉は〈この像〉を描くし、これを〈観念〉にするであろうが、しかしその〈観念〉は、彼がまた②で続けていう〈感覚がわたしの外に存在する事物から生じていたとこれまではわたしに判断させた〉に従うと、かかる〈事物から生じ〉た〈感覚（sentiments）〉に依拠する〈観念〉、すなわち〈外来観念〉であるにすぎない。ところがここで彼が、〈脳本体（esprit）〉における〈観念〉をば、〈生得観念〉や〈作為観念〉以外にこの〈外来観念〉をも含み入れて認めてしまうとすると、〈esprit〉と身体（感覚）を二元に区別し打ち立てる〈真理の探求〉はいったい何んだということになる。

〈真理の探求〉（の認識論）には〈外来観念〉は与してならない。それは前段の引用文中の〈これまでは（jusqu'à cette heure）〉の語句に隠されている。要はデカルトがそこで〈これまでは〉と付け加えるとき、彼は〈外来観念〉という、〈sentir〉の能力の働きかけで成る〈感覚（sentiments）〉に代わって、〈わたしの外に存在する事物〉に関与し得る能力が欠けてならぬことをほのめかすからである。別言すると、〈感覚〉の〈事物〉との関連は〈これまでは〉のことにすぎないとみてとれば、彼がかく綴った瞬間の今をして、同時にその〈事物〉との関連をいかなる諸能力で埋めるかを、彼は脳裏に刻んでいたということである。

こうした諸能力はいわずもがな、筆者が以前から指摘していた、上記の〈sentir〉（または〈imaginer〉）を除く、〈concevoir（entendre）〉などの〈思惟す

る) 諸能力なのである。しかも〈思惟する〉諸能力によって、おのおのが〈感覚〉(または〈想像〉)を通して〈事物〉にかかわるのでなしに、直接〈わたし(精神)の外に存在する事物〉に働きかけては、〈わたし(esprit)〉に〈この像〉をもたらし、〈観念〉にするその〈観念〉は、もはや〈外来観念〉ではなく、〈作為観念〉と呼ばれるしかなくなる。つまり〈作為観念〉はこの〈思惟する〉対象を身体を介さずに、〈わたしの外〉の〈物質的事物〉に据えて〈思惟する〉ことで獲得されよう〈この像(観念)〉であるということになる。

〈作為観念〉を生じさせることのない〈感覚〉(または〈想像〉)による〈外来観念〉はだから、〈sentir〉(または〈imaginer〉)が〈思惟する〉諸能力に組み入れられているとみるにしても、〈思惟する〉とは実際無関係な各能力に基づくしかない各〈観念〉と語られるほかならう。本来〈思惟する〉諸能力として〈脳本体(esprit)〉に与する〈sentir〉や〈imaginer〉は〈脳本体〉内で働きかけることがないために、そこでは「思惟しない」各能力となる。その代わり各能力は〈脳本体〉から出て、〈脳〉の他の「部位」である〈腺H〉に対し働きかけた。しかし各能力のこの「能動」的働きかけの結果は、〈脳本体(esprit)〉にとって排除されずにいない〈感覚(sentiment)〉や〈想像(imagination)〉なる各身体能力の産出にかかわらせるので、その各働きかけ自体は〈esprit〉に直結する〈思惟する〉にはならないし、各能力も当然〈思惟する〉諸能力の一に数えられさえしないのである。

たとえば〈思惟する〉中の〈思惟する〉能力〈理解する〉は、〈感覚〉や〈想像〉たる各〈像〉の産出の契機と同様に(各〈像〉は既出引用文⑦の〈脳のいくつかの部分に描かれる... この像〉に該当するし、かかる〈部分〉はこの場合、〈腺H〉あるいは〈脳の凹み(空室)〉をさすと、また〈この像〉はいわば外来像にとどまるのだから、〈この像を観念と呼ばない〉とみたことは前記してある)、〈思惟する〉対象を〈わたしの外〉の〈物質(外来)的事物〉に求め、これに働きかけるのだが、デカルトが同⑦でいうもう一つの〈この像〉すなわちこの〈(作為)観念〉は、〈感じる〉や〈想像する〉のでない、まさに〈思惟する〉にあったからして、〈脳本体(esprit)〉にて表出する以外にないわけである。しかも〈作為観念〉は〈脳本体(esprit)〉である〈わたし〉によって構成される〈観念〉になるといい得るので、実際〈観念〉形成にかかわる当の〈物質(外来)的事物〉たる対象すら、彼の意を思いはかると、すでに〈物質(身体)〉

のではなくして、〈esprit（精神）〉としての対象になるしかなくなる。そこで、それ自体〈延長〉であって「思惟しない」とされる〈物質（外来）的事物〉は、自らで〈延長〉や〈精神（思惟）〉のいずれかになるといえないにせよ、まるで〈わたし〉の方から一方的に〈esprit〉の対象に捉えられてしまう以上は、それだけで〈観念〉を〈思惟（作為）する〉にとって、欠かしてはならない対象となる。そうでないと、〈真理の探求〉はたえず〈物質（身体）〉にかかわり続けるのである。

しかし、デカルトが〈思惟する〉による〈作為観念〉において、〈物質（外来）的事物〉を考慮せずに、〈真理の探求〉（の認識論）さえ打ち出せないということは、〈真理の探求〉（の認識論）がそれ自身に、〈作為観念〉のみか、〈生得観念〉も含ませていってよかろう観念論に従うほかに、実在論に立ってあることを明らかにさせる。まさしくこれは、シモーヌ・ヴェーユが既出引用文◎で、〈観念論と実在論〉が〈真理の探求〉（の認識論）にあっても、〈両立し、…相関的でもある〉とみることに符合する。これはまた同⑩でいう〈不明瞭、難点、矛盾〉を〈真理の探求〉において惹起させかねないであろう。彼が〈真理の探求〉にプラトンで周知の〈観念論〉を取り入れただけでないと彼女に語らせるのは、彼自身の記す次の引用文を参照すれば諒解できるであろう。

⑫ Les vérités que je dirai ne laisseront pas d'être bien reçues, encore que je ne les emprunte point d'Aristote, ni de Platon.⁽²²⁾

わたしは、わたしが示すであろうさまざまな真理を、少しもアリストテレスやプラトンから借りるのではないが、こうした真理はわたしにとって十分に認められずにはおれないであろう。

〈思惟する〉にでなしに、まずは感覚による〈事物〉を認識する〈真理〉を提供したのがアリストテレスであり、デカルトがこの感覚と〈事物〉の関係を〈思惟する〉にとって拒否するにしろ、一方でその〈思惟する〉において〈事物〉との関連を欠かさずにいることをみるにつけ、これを上記引用文⑫中の〈さまざまな真理〉の一に加えられると筆者が同時に語り得ては、この一をして何もプラトンの観念論に満たされとどまらせるだけが〈真理の探求〉にさせ

るのではない、要するに〈さまざまな真理〉は〈真理の探求〉のなかにさえ、プラトンのみか、アリストテレスのいう一〈真理〉を、すなわち〈實在論〉を含むと、さらに次回に質す一問題の〈日常的用法〉にも、〈アリストテレスやプラトン〉それぞれの認識論上の實在論的、觀念論的見方が反映されていると筆者もまた指摘できるのである。

ここでは別の既出引用文を用いて、筆者はもう一度、〈真理の探求〉に〈實在論〉の抜けがたくあることを証明する必要がある。一に、〈脳本体 (esprit)〉が感覚の〈誤る、欺く、信用できない (既出引用文①参照)〉という指令 (判断) を発して、〈目を閉じ (させ)、耳をふさ〉がせ、かつ〈物質的事物のあらゆる像〉を排除させねばならぬと断じる註(7)註欄の既出引用文 (同様に④) において、この〈(物質的) 事物〉は〈目を閉じ、耳をふさ〉ぎ、その〈あらゆる像〉を排除しても、目の前から消え去らないであるはずである。また、身体 of 五感や内臓感覚という各感覚器官に受容される〈事物〉はその各身体器官での能動的能力〈ressentir (感覚する)〉⁽²³⁾ の働きかけによって、各器官には各身体 of 〈sens〉が産出されるほか、この〈脳〉に伝達された〈sens〉に〈脳本体〉を出所にするが、〈思惟する〉能力にもはや数えられない〈sentir〉を働かすならば、〈腺 H (脳)〉には〈sentiment〉も産出されようが、それでも当の各産出能力が〈脳〉にあっては遮断排除される運命に出会う途中まで、〈像〉の起因となった〈事物〉とはいえ、〈事物〉は現前しないわけにはゆかない。

しかしながら、前段に記した、〈脳本体〉の「指令 (判断)」とはまさしく〈思惟する esprit〉のそれであって、身体 of する指令 (判断) ではない (身体は「思惟しない」は既出引用文⑥参照)。身体たる、内外感覚諸器官や〈腺 H〉は〈思惟する〉と無関係であっても、しかしそれぞれにて感覚を産出し、その連結的な〈運動〉を稼動とする機械であるとされる。それはデカルトでは〈血液〉や〈神経〉に与する動き (生理) であるからして、かの「指令 (判断)」以外、何よりもまず〈わたしの外に存在する事物〉とかかわらずして、生理は生じてこない。しかも偶然か故意か〈目を閉じ、耳をふさ〉いだり、重い病や死に至ったりするほかは、〈事物〉とかかわるこの〈運動〉を〈わたし〉を含めた誰も、何も止めることができないばかりか、動き続けるしかないのである。また、この感覚の遮断 (排除) は、上記の「生理的運動」と多少異なろう、たとえば〈目を閉じ、耳をふさ〉ぐ〈運動〉にあると察知されるからだ、この〈運動〉

も目の前に〈事物〉があることで始動し出すにちがいない。なぜなら〈事物〉があると認めずば、〈わたし〉はもとより〈目を閉じ、耳をふさ〉ぐ〈運動〉に移ることなど必要ないからである。

一に、ましてや〈(物質的)事物〉は〈思惟する〉対象として存在していなければならない、換言すると感覚が遮断排除されるにせよ、その代わりとして今度は〈事物〉が〈思惟する〉対象となって登場するからこそ、存在せずにおれなく、これを欠いては〈思惟する〉ことが可能にならないということである。このことは既出引用文⑧から導き出される。デカルト自身さえ、〈いかなる像も精神 (esprit) に受容されることはない〉と断じつつも、〈事物〉自体に関しては、〈物質的[・]事物〉や〈非物質的 (知的) 事物〉に対する純粋な知性 (思惟) はいかなる物質的[・]像もなしにかたちづくられる〉といっているのではないか。しかし。この〈知性 (思惟)〉において、それこそ同⑥中の〈明晰で判明な観念〉が、〈身体から区別された観念〉が〈いかなる物質的[・]像もなしに〉、直接〈事物〉と接し〈事物〉を通して〈脳本体 (esprit) 〉に〈かたちづくられる〉と理解させるのである。すでに〈身体から区別され〉、「非〈質料 (物質)〉」とみた〈esprit〉の〈思惟〉と対峙する各〈事物〉、わけても〈物質的事物〉は、その存在を認める前提に立つのはむろんのこと、もはや〈延長 (身体)〉ではなく、〈思惟 (esprit) 〉としての〈事物〉になると捉える以外を許しはしない。(ただし〈精神 (esprit) 〉の〈思惟〉の一方的な働きかけに支えられてある (彼以来〈わたしたちは〉そうしてきた) ために、〈事物〉を果たして現実のあるがままの姿で〈concevoir (理解し) 〉得るかは多少疑問が残るところである。)

デカルトにとって、〈思惟 (する) 〉の対象の〈事物〉なしに、〈真理の探求〉での〈作為観念〉や〈生得観念〉が実らないのもまた事実である。この〈思惟 (する) 〉がめざすは、〈きわめて明晰に判明に理解する〉⁽²⁴⁾、〈pensée (思惟) 〉中のその〈思惟〉によって、〈わたし (esprit) 〉が〈わたし〉のうちに〈生得観念〉としてあろう〈わたし (の存在) 〉のみか、〈神 (の存在) 〉や〈物質的事物 (の存在) 〉を認めんと作為することであって、この認識こそ観念論であるといつてよいのである。ここで〈(物質的) 事物〉についてなおもうと、これに関する〈作為観念〉が〈生得観念〉としての〈事物〉を確証する以前に、目前の〈事物〉とじかに向き合って〈思惟する〉なかで誕生してくる一方、さらに〈わたし〉のうちにある〈生得観念〉としての〈事物〉を想定し、目前の〈事物〉

とのへだたりを〈思惟（する）〉で埋める寄与を有することになる。その際〈非物質的（知的）事物〉を〈思惟（する）〉の対象にもなし得るとはどういうことか。たとえばこうした〈観念〉を〈思惟（作為）する〉にしろ、〈作為観念〉は〈物質（外来）的〉な何らかの〈事物〉を感覚し、そこに〈非物質的（知的）〉な、たとえば歎び、悲しみ、聡明さ、神を〈感じる〉が、それでもこれらの感覚（感情）をば（esprit）から遮断排除し、〈作為〉して獲得される〈観念〉でしかないとするならば、〈esprit〉はその〈思惟（作為）する〉因となった〈事物〉を拒否するだけではできないであろう。こうして〈わたし（esprit）〉は〈事物〉を〈作為観念〉を土台にして〈生得観念〉に結びつける、すなわち〈わたし〉は〈esprit〉に〈作為観念〉を通して〈生得観念〉を見出すに至るのである。

〔続〕

なお、シモーヌ・ヴェーユの引用文は《Sur la science》Gallimard、デカルトの引用文は《ŒUVRES LETTRES》Gallimard による。

註

- (1) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》P.19
- (2) Ibid., P.32
- (3) Ibid., P.39
- (4) Ibid., P.P.46-47
- (5) René DESCARTES 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.572
- (6) René DESCARTES 《MÉDITATIONS (TROISIÈME)》P.287
- (7) Ibid., P.284 (Je fermerai maintenant les yeux, je boucherai mes oreilles, je détournerai tous mes sens, j'effacerai même de ma pensée toutes les images des choses corporelles, ou du moins, parce qu'à peine cela se peut-il faire, je les réputerai comme vaines et comme fausses. (いまわたしは目を閉じ、耳をふさぎ、あらゆる感覚を退け、物質的事物のあらゆる像を自分の思惟から消し去るし、あるいは少なくとも、消し去りがたくば、これらの像を当てにならない、見せかけのものともみなすであろう))
- (8) 〈la recherche de la vérité（真理の探求）〉という語句は、《RÈGLES POUR LA DIRECTION DE L'ESPRIT（精神指導の法則）》P.38, 《DISCOURS DE LA MÉTHODE（方法序説）》P.127, P.147, 《MÉDITATIONS（省察）》P.260, 《LES

PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE (哲学の原理)》P.567, P.570, P.572などにある。

なお、〈la recherche〉はデカルトが抽象的なものばかりか、具体(物質)的なものまでを探り明らかにしたと本文のちの、シモーヌ・ヴェーユの引用文◎とかかわらせて記す筆者の意図に従い、「探究」ではなく、〈探求〉と訳しておくことにした。

(9) René DESCARTES 《MÉDITATIONS (SECONDE)》P.278

(10) Ibid., P.277

(11) René DESCARTES 《OBJECTIONS ET RÉPONSES (CINQUIÈMES RÉPONSES)》P.484

筆者が註(10)の前段落中の〈知性〉の語の例に〈intellection〉を当てたのは、この註(11)の引用文⑥による。他にP.507etc.にもその語は一見できる。

(12) Ibid., (QUATRIÈMES OBJECTIONS) P.423

(13) Ibid., (SECONDES RÉPONSES) P.390

(14) Ibid., (TROISIÈMES OBJECTIONS) P.403。そこには〈les actes intellectuels n'ont aucune affinité avec les actes corporels. (思惟的働きは物質(身体)的働きとはいかなる共通性すらもない)〉とある。

(15) Ibid., (SECONDES RÉPONSES) P.394。そこには〈une idée... inhérente en l'esprit même. (精神そのものに根ざす観念)〉とある。

(16) Ibid., (CINQUIÈMES RÉPONSES) P.507

(17) Ibid., (QUATRIÈMES RÉPONSES) P.450

(18) René DESCARTES 《DISCOURS DE LA MÉTHODE (QUATRIÈME PARTIE)》P.147, P.148 または《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.573

(19) René DESCARTES 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.573 〈Celui qui pense ne peut manquer d'être ou d'exister pendant qu'il pense.〉

(20) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》P.707 (ART23)

(21) René DESCARTES 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.574

(22) René DESCARTES 《LA RECHERCHE DE LA VÉRITÉ PAR LA LUMIÈRE NATURELLE》P.881

(23) René DESCARTES 《MÉDITATIONS (SECONDE)》P.279 (そこに〈Je ressens la chaleur〉という用例がある。筆者は、〈esprit〉や〈âme〉で用いられる各精神の一能力〈sentir〉を〈感じる〉との訳と比較させるうえで、身体のこの能力を〈感覚する〉とした。

(24) René DESCARTES 《DISCOURS DE LA MÉTHODE (QUATRIÈME PARTIE)

P.151 (Les choses que nous concevons très clairement et très distinctement sont toutes vraies (わたしたちがきわめて明瞭に判明に理解するものはすべて真である))
という文章の一部の引用。